

# 40年単位で考える日本の近現代 その1

千葉商科大学大学院教授 伊藤 宏一

前回指摘したのは、江戸時代までの日本が、多様で多元的な「たおやめぶり日本」だったということだが、それではこれがなぜ、どのようにして、一途で窮屈で同質的な「ますらおぶり日本」になってしまったのか、これが私たちにとって重要な問題の一つだろう。そこで、このテーマについて何回か論じてみたい。その際、日本の近現代史をおおよそ40年単位のアップダウンと考える方法論をとりたい。また新しい制度の骨格は半分の20年でほぼ見えてくるので、20年経過時よく見ておきたいと思う。

40年単位とは次のようなものだ。近代日本の起点である1868年の明治維新をはじめとし、1905年の日露戦争勝利までの約40年が「富国強兵の上り坂」、その後1945年太平洋戦争敗戦までが「富国強兵の下り坂」で、合計約80年の近代日本サイクルとする。これは、要するに「世界の一等国」から「日本史上初めての他国による全面占領」への道のりだ。

次が1945年の敗戦から、1985年ないし1989年までの戦後「米国依存の富国上り坂」、その後、高齢者人口が3割を超えると予想される近未来の2025年までが「米国依存の富国下り坂」で、この80年を現代日本サイクルとする。85年プラザ合意による円高、89年不動産バブル頂点で日経平均最高値・ベルリンの壁崩壊による冷戦構造の崩壊・昭和終焉・消費税導入は、現代日本の下り坂への歴史的分岐点だろう。これは、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」から「超高齢・成熟国」への道のりともいえよう。また近代日本サイクルの当初は、江戸時代までの伝統的な価値観や制度の過激な否定から出発したが、現代日本サイクルの当初は、近代日本サイクルの中の富国のための集中システム(1940年代体制＝戦時体制)を温存した点に注意したい。

そして今、日本に求められているのは、結論を先取りしていえば、「ますらおぶり日本」から「たおやめぶり日本」「知恵・芸術・倫理の和の国日本」への大転換であり、同質・集中から多様化への、アジア大陸を向き、再生可能エネルギーで暮らし感性も精神性も豊かな江戸時代までの伝統的日本の高度なバージョンアップではないかと思う。

ところで、この40年という時間は、一国の新しいシステムを作り、それを熟成し機能させていくにはあまりにも短い時間であり、したがってそこには極度の集中と何重もの無理と物理的・精神的負荷が予想される。……案の定、近代日本の上り坂について、夏目漱石はさすが、そう思っていたようで、次のように酷評している。

「日本程借金を拵(こしら)えて、貧乏震いをしてる国はありゃしない。此(この)借金が君、何時になったら返せると思うか。……日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでいて、一等国を以て任じている。そうして、無理にも一等国の仲間入りをしようとする。だから、あらゆる方向に向かって奥行を削って、一等国丈(だけ)の間口を張っちゃった。なまじい張れるから、なお悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。其(その)影響はみんな我々個人の上に反射しているから見給へ。こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、碌(ろく)な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、そうして目の廻る程こき使はれるから、揃って神経衰弱になっちゃう。話をしてみ給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考えてやしない。考えられない程疲労しているんだから仕方がない。精神の困憊(こんぱい)と、身体の衰弱とは不幸にして伴っている。のみならず、道徳の敗退も一所に來ている。日本国中何所を見渡したって、輝いてる断面は一寸四方も無いじゃないか。悉く暗黒だ」(『それから』1909)

この文章は、今日にも通じるものがある感じがするが、どうだろうか……。

近代日本サイクルの最初の40年の中間点が1885年前後だが、1886年には帝国大学(東京大学一校のみ)ができて官費育成を始め、89年には大日本帝国憲法ができ、1890年には帝国議会議と帝国ホテルができ、日本は「大日本帝国」になった。「大日本帝国」という言葉には、この国が誇りある素晴らしい国なんだという気負いと想いがあり共感すべきところも少しはある。しかし他方で、当時の国力を客観的にみれば、また奥ゆかしい謙虚の国日本の伝統からいえば、「仰々しく本当の自信がなく劣等感のある者ほど空威張りする」という文脈も感じざるをえない。「帝国」という言葉は当時のドイツやロシアのまねで、いかめしい「ますらおぶり」の軍服に勲章と偉そうなカイザー(皇帝)髭(ひげ)がその人的イメージになるが、「大」については、憲法に関してこんなエピソードがある。

初め伊藤博文が提出した憲法案では「日本帝国」の表記だったが、憲法案を審議する会議の席上、副議長が、皇室典範案に「大日本」とあるので文体を統一するために憲法も大日本に改めることを提案した。これに対し憲法起草者の井上毅書記官長は、国名に大の字を冠するのは自ら尊大にするきらいがあり、内外に発表する憲法に大の字を書くべきでないとして反対したという。結局、枢密院議長であった伊藤博文の裁定により「大日本帝國」に決められたそうだ。「大」とつけることが背伸びしていると感じる井上毅のような冷静な判断をする人が明治政府内にもいたわけで、このことに私は少しホッとす。本当に誇りある国は、必ずしも軍事的・経済的な数字の上で一等ではなくて、その国の人々はその人に対してやさしく、思いやりと心配りがあり控えめで気品があり、その意味でどの国の人からも一目置かれる深みと品性のある上質な国であるのではないだろうか。かつてこの国にはそうした真に誇りある要素が連綿としてあり、そのことを感じ取っていた外国の優れた知識人も少なからずあった。

次回からは以上の歴史サイクルにそって印象的な論点を仔細に見ていきたい。(2011年1月20日)